

○**田島（一）委員** 民進党の田島一成でございます。

時間が限られておりますが、原子炉の安全研究が御専門の更田参考人に対して質問できることを大変光栄に思っております。

二〇一二年の規制委員会発足時から、メンバーとして田中委員長の背中をずっと見続けてこられたこと、そして二〇一四年には委員長代理にもついていらっしゃるということで、一定これまでの動きや流れを踏襲していただけるものというような理解、認識を持っておるところでございます。

ついせんだって、三月にも、私ども、IRRSを受けた形での炉規法改正等々に当たらせていただきました。そう考えれば、新しい流れでの検査体制や研究等々を今後進めていただくわけですが、どの点が変わるのだろうか、また、委員長が今回このようにかわられるとなったとき、更田参考人におかれては、背中をごらんになられたというわけではありますけれども、しっかりと田中委員長の足跡を踏襲していただけるという認識を持っていいのかどうか、簡潔にまずお答えいただけますでしょうか。

○**更田参考人** 今回、炉規法改正に当たってお認めいただいた検査制度の改正に当たっては、やはり事業者との間のコミュニケーションの改善、それからスキルの積み重ねによる検査官の能力の充実等々がキーになってまいると思いますけれども、その改正の中で骨子となるのは、事業者責任の明確化、それから、あらかじめ決められた項目をチェックするといったものから、より柔軟な、より重要な点に特化できる検査制度に移行していけるものと考えております。

それから、田中委員長、ずっとそばで仕事をしてまいりました。確かに私は、田中委員長より十二歳若いので、どうしても経験に欠ける部分は否めないと思いますけれども、田中委員長は、非常に芯のしっかりした、ぶれない委員長であったと思います。その姿勢から学んで、田中委員長が歩んできた路線を踏襲し、また同時に、改善すべきところは改善してまいりたいと思います。

○**田島（一）委員** ありがとうございます。

今後の原子力規制委員会のあり方について、かつて田中委員長も、推進と規制はもっと明確に分けるべきだというコメントを何度も出していらっしゃいました。そう考えますと、やはり独立性を持った規制委員会が発足していくことを田中委員長も歓迎されていたわけですが、残念ながら、今回、新たなメンバーの顔ぶれを見ますと、規制側とそれから推進側の両方に足を突っ込んでいらっしゃる方もいらっしゃるやにお見受けしているところであります。

そもそも、福島第一原発事故が発生した原因というのは、推進派と規制派のなれ合いを続けてきた結果、必要な規制がなされずに招いた事故ではないかという見方をされる方々もいらっしゃるわけですが、このように、両方に所属をしていた経験のある委員がお入りになられる中で、やはり頼りになるのは委員長のリーダーシップではないかというふうに思っております。

独立性を今後しっかりと担保していくために、委員長として特段のリーダーシップを発揮していくための御所見をぜひお聞かせいただけませんか。

○**更田参考人** 委員のメンバーは、主に研究者出身であったり、ないしは教職出身の方々が構成されております。

研究者や教職に当たる者は、これは原子力を研究対象として見ますので、どうしても、規制であるとか推進であるとかというものにとらわれずに、技術そのものに対する関心であるとか科学的興味から業務に

当たってきて、必ずしも推進側であるとか規制側であるとかという色分けは当たらない出身者であろうと思っています。

一旦、規制委員会としての委員としての職務については、これは安全のみを科学的、技術的根拠に基づいて判断する立場でありますので、推進側の論理であるとか経済性であるとか、そういったものを忘れるというのは、これは我が国だけに限らず規制に当たる者の基本的な姿勢ですので、これについては徹底してまいりたいと思います。

独立性につきましても、これは、同時に透明性を高めて、そのプロセスや議論の内容を広く聞いていただくことによって、独立性を担保するための大きな助けになるだろうというふうに考えております。

○田島（一）委員 最後の質問に入らせていただきます。

今回、法改正の段階でも議論させていただいた I R R S が指摘する問題点のうち、やはり全ての被規制者との意思疎通不足というものも掲げられておりました。

先ほど参考人も、現場の皆さんとの対話を重視していきたいということをおっしゃっていただいて、少しほっと胸をなでおろしたわけではありますが、今回、この規制者である委員会というのは、犯罪を取り締まる警察とは異なって、立場をわきまえつつも産業界との関係を醸成し続け、また、現場の皆さんから、さまざまな学びの姿勢をしっかりと持ち続けることが何より大切だと思います。

安全文化を国民に浸透させ、原子力行政の信頼回復につなげるために、その決意をもう一度改めて聞かせていただき、質問を終わらせていただきたいと思います。

○更田参考人 事業者とのコミュニケーションにつきましては、当初、電力経営層との意見交換から始まって、現在では原子力部門の責任者との意見交換、これも透明性を確保しつつ行ってまいりましたけれども、さらに重要なのは、それぞれの施設の現場とのコミュニケーション、これも透明性に関してのプロセスを工夫しながら今後ともさらに進めていきたいと思っておりますし、また、東京で会っているだけではなかなか進まないところがあって、私は、昨年一年間で七回原子力発電所を訪れることができました。

仮に委員長になった場合、時間的な制約はいろいろあるかと思いますが、できるだけ現地に足を運ぶ努力はしたいと思っております。

○田島（一）委員 終わります。